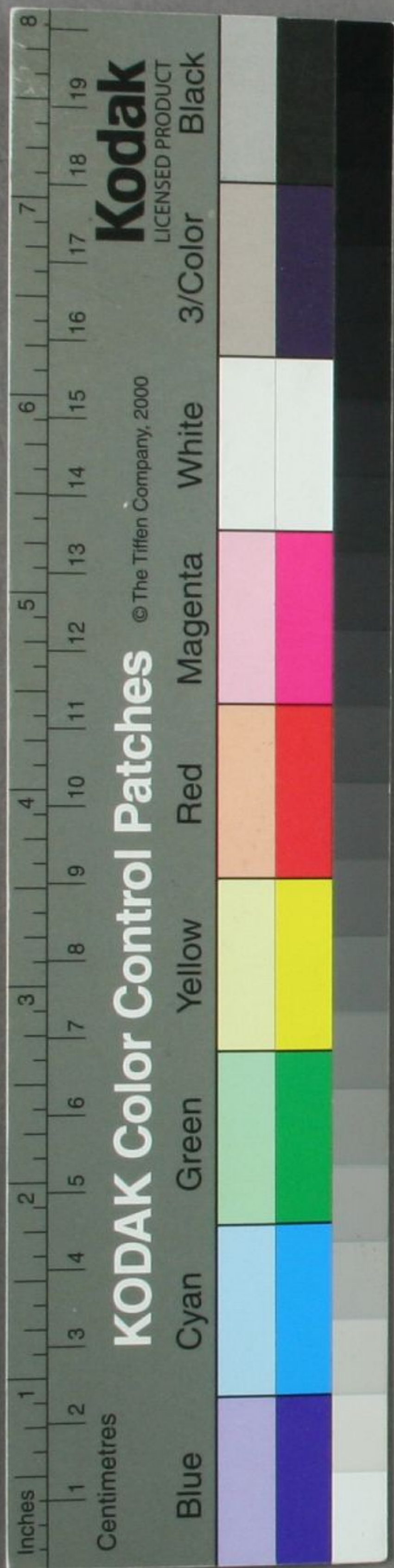




伊地知文庫
文庫20
125



一、室所 公 連 新 式 新 式 新 式
之川集作室所公連新式新式

三條侯條公前序



伊地知氏書冊

△連 新 式 新 式 新 式 新 式

△建 治 年 中 式 同 後 常 光 園 標 政 殿

△二 東 殿 應 安 追 加 志 書 改 新 式

△即 是 也 未 加 京 追 加 志 也 新 式

△案 後 常 思 寺 同 白 友 諸

△如 士 案 集 宗 初 法 被 相 後

△身 德 年 之 後 文 電 年 月 柏 光

△請 勅 撰 給 書 後 二 冊 是 也

△一 建 治 式 同 用 作 云 時 代 一 勅 之 不 書

△年 式 善 化 云

一建治式目序云夫連歌一首其初句
と二度し云式ある人として謂之也然し
二句外指合ふと云ふは毎句連歌
と上指極物と記録して其意趣を
定と云ふは義小准と云ふ新式と云ふ也

一歌字集

韻といふ乃ち五也漢和歌句に歌と臨
也といふと云ふと云ふと云ふと云ふと
歌といふ此条に不用義と云ふは
と云ふ新式と云ふは初句と云ふは初句

と云ふは初句

一物名 何ゆり言ふと云ふは初句
は字と云ふは朝夕乃ち字に物名
詞の字といふは是と云ふは初句
不嫌之と云ふは追加乃ち詞也

一詞字

は字と云ふは朝夕乃ち字に物名
は字と云ふは朝夕乃ち字に物名
は字と云ふは朝夕乃ち字に物名

一乃ち安也

輪回と云ふは初句と云ふは初句

不中付く又不一皆之化唯之節
寢月も露のしるはきりりある
夕ののどき

一本哥此事述あわいさうす
たふ

月まじりやひきりし
河まじりやう駒杖の春
岩まじりやあふさるる山

前

相坂のきん乃志あ小氣ふと

とやひらじり月か海
後あふさるる雲の端と端

と云ふと付又都と云ふとみ
と云ふと付又都と云ふとみ

前もみんふれ都さるる
あふさるるのうりいあまは

後も、まにわさるる泉川
久風さし夜せし

一本哥續後撰集すれと二月也古今

702

一。尤物といふ字やといひてもねむいから

物と云ふ事也

詞源氏物語下

物と云ふは
虎
新
物也

元子の子勝也

一、○ 名 榮○ の 布○ 芝 木 痛 丸 石 一 片 之

牡丹
牡丹

一
萬
年
名
畫
也

此故可也

白鳥 子々多因 定勝親書

善此乃爲之用。說子

又
或說
吾人
何人
是日
長生
之
是
知
也

山川乃い極かふふふ

何うと記す事ある

この哥のひまに
おのれもふ

一
帽

う
は
ふ
も
た
い
と
經
く
る
あ
ら

大
名
之
と
そ
の
め
う
山
奥

秋之味心之聲兼載

一 女と来女といせは月夜の御也

一 雨と代と也あめ二さめ一わたり

梅あ五月あ夕立志く事二空八也

あといわると語へ一えくい事わたり

一 嵐し山おしじりして一あせと

一 朝夕^{風の音のまね}風山あふたり也

朝夕^{風の音のまね}あふたり也書月と

えとも同也

一 あれこひつ^{ヒタ}也 打本^日板

一 ひとと云れきり^{ヒタ}なりともなり也

と云へともなりしと云へもなりし

夕立あめのおせ又これしりあすし

し一雲しけりあすしりあすし

とんはあすし

一 雲あ小あふ急雨うれといつ事也

と云へとも一と云へもあめあすし

あふりあめともなりし内につ事と

と一何う也

一 馬あわると語へ一馬駒一驛馬の

ともしり意あひしりゆい海木と

一。避日と小善の著る事など記

一寒字去
四云長安
秋と國の
ゆはる

忠孝人物雷如也

田令
冬
寒
一
年
多
冬
寒
也

あゝ
祇公獨吟の句
取に冬

此寒二三句
伍拾五句

さゆると香るゝていそれ字の裏に

一〇
神皇居
神
社頭の
存
在
を
い
ふ

秋乃居取
 花燭之庭
 と云ふの
 可也

我説砌厝前
三句目云
厝也

一床 和ふ也 沖と云ふ水也

二座二句之物

一
 曉
 勤
 世
 才
 多

一代神代君代の世の字に

伏子力句婦

梅多不富卯月。洛。而。主。梅。

五月、洛陽、梅村、と云、然、六月

不
混是
与
命

稻
田
法
令
乃
法
度
村
規
村
規

一 ちと二 何の遠と二あるへす
一 中 中 上句よりゆへに
巴云 新式 上句より完結
一 事也

一 詞言は葉とわくと二何へ一又
詞言は葉の道とわくと二言は
葉とわくと二何へ一又
一 葉一 詞一の字は不嫌言はし一葉
は字五句嫌也
一 甚一 法のりく二甚若し一

一 何の二一上二

一 祓只二迄二 何の二一上二

一 祓只二迄二 何の二一上二

一 祓只二迄二 何の二一上二

一 祓只二迄二 何の二一上二

一 春月 二三月 一 夏冬 二三月 一 祓只二迄二 何の二一上二

一 祓只二迄二 何の二一上二

一 祓只二迄二 何の二一上二

一 祓只二迄二 何の二一上二

一 祓只二迄二 何の二一上二

わすれぬ火の事なり

一△座四句物

[illegible]

一○并只一名前一考杖とけり笑杖男

望三子

一、空、四、外、中、天、二、星、同、そ、う、と、亦、は、
た、り、と、う、と、何、う、か、

一。水あつたはいらたうひ霜
月夜の水もつたはいらたうひ霜

替也
 新代
 水為
 也

[illegible]

入相端の和同あるは端なり
云々 咲端より中比不用高時

二

[illegible]

禽獸同家

一。屋字之家。女字。宿乃。女字。也。讀。

二座五句物

平世名の世と云ふは此の世に於て

本懷乃在二日
世一前後
○
一電

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

喜梅
紅采
梅乃
重紅
阿之
一
九四

此物

一橋乃裏一柳市階身乃浮橋水

巴玄 隋書卷八十五 世國之志 七 書之

わろ

一△可嬌打越物

付一爐同懷安之物未
打散と爐と付く用打散と爐と

一。濱底波のせき立砂底似

五式
日云
賓
小
依
句

一雨云
上
之
庭
字
唯

從年物上二句

一わかしと林の中に正月十四日

十六日卯の事也。宏居の如く唯之

要ふと云ふ付く諸物よ二句嫌也

時と時
はく
さう
著
暖
何

朝比古的村等の不及少法曙の不足
わうへん也物と幸と次と教也

一 穫 株道平村の二句端と不端株
物と家祇八ヶ条とほく株打
二端也

一 園 生とて同株也一端打込
居也

一 藪 生とて同株也一端打込也

一 秋田 府鹿と結と不端株物事
田と常しなり

一 秋田 府端乃才と鷹鹿中と香と結
と結と結とありと論

一 心乃 松と株物と不端物と幸と
松と株物と一端打込家祇八ヶ条
幸と心乃松と好文也

一 下 朋冬枯と下り冬乃何や
冬枯乃ありと冬と冬と略也

一 老 じり背向と結

一 放生 海と又水色也とい生れ水色也

一 驛 じまやと唐と勅使と此道

馬とつゝ急^急なる驛とく
 日本中もじい驛わの菅家文
 左遷れと驛長勿教馬時表は
 一葉一落是春種と作也馬は
 じ家と云ふと生れ二種と
 一温日与長閑とわとわと
 以上とて目の字とく
 一冷寒身めじいつと二句宛を
 以上とて一屋と家
 一いふは在郷古たの二句あり

ありと嬌と次といふとく
 一松と子曰老葉と松と子曰甘く句
 入る付信あり

春とてみね松の葉乃文
 子曰甘く句と人あふなり
 一春とてつと二句嬌之信の字とて
 としは

一願小足は字二句嬌但身とわと
 西成と下と句のわとわとわと
 月ととと力句嬌也然とこのあは

願乃字一讓と名二句嬾の
 月性之嬾人何ん又あふ金す

一。王秋の著。夕秋と云ふも也。善字。

一、木も少けし氣面と云ふ二面嬌を像化
とすなり也陰より面を

一。新陰二句嫌也。陰一。中下回面連。
新陰一。陰一。中下回面連。
新陰一。陰一。中下回面連。
不嫌也。

一。洞小袖ゆへに依る不苦近き

丁亥

[illegible]

一
別歸族の別し悔不若し辟若し

市人長乃鼠

七

山路
行
爲
多
苦
矣

一
ね
ね
あ
い
は
る
の
ね
も
可
計
な
ら

一、侵定、身と嬌、目、髪、祿、さめ。

之物也

一。吟。一。曝。二。句。也。是。也。初。時。は。あ。る。可。
嬌。之。曝。を。時。に。初。也。持。の。晨。の。戸。を
の。く。そ。も。に。嬌。く。但。戸。と。あ。る。何。
付。句。計。嬌。也。

一。夕。三。夕。字。五。句。也。

一。窓。一。戸。付。句。嬌。之。事。勿。論。に。打。越。
嬌。の。何。も。居。不。可。也。室。乃。戸。居。取。
あ。す。す。打。越。一。嬌。く。役。を。本。枯。も。さ。
枯。も。二。句。通。也。風。と。ま。也。

一。野。多。山。過。一。か。の。頭。乃。字。か。と。り。と。

後。也。

一。入。逢。一。曉。嬌。と。云。初。一。入。字。逢。は。さ。二。句。
也。云。逢。は。二。句。中。に。逢。は。い。事。付。今。嬌。也。

一。三。十。四。十。と。い。の。鈴。の。事。也。只。數。は。可。
罕。の。う。ら。と。不。謂。古。今。は。席。り。辛。
一。と。ま。た。也。と。哥。と。い。い。と。み。
と。い。い。と。

一。詠。一。同。詠。と。い。い。と。い。の。り。と。云。嬌。
人。あ。い。さ。の。と。立。入。と。嬌。の。不。可。也。
一。物。り。し。は。物。れ。字。思。は。二。句。嬌。の。襟。也。

如也。逆物と云ふ中々云ふは、向ふ

一名殊。殊字名子而。余波と也。

一
山
や
想像
と
出
り

[illegible]

福也

一志海山物志中驗也志人揭焉

とまふてかへりてす

いはいはくま何乃孝に因續し云ふ
りい句嬭也

[illegible]

婦とこれとの字

一成乃字也。此字同積。云云。不嫌也。

西の
 石
 日
 言
 不
 但
 言
 然
 の
 字
 と
 し
 手
 文
 と
 也

言
た
と
つ
ゆ
う
い
ふ
一
面
の
婦
女

○ 衆心修持道了要行と不煩也

文字の事二百篇迄一塵い

と行ぬめり美なり
所用は字とある
とす不^レ結と也名^レなり
物なり

里わきあきあきと云ふ様子
乃詞と云ふ二三个取らるるなり
ありと云ふ也

一 蟬と日咲夏の蟬秋の蟬也なり
のちと云ふ也 中 蟬と云ふは
日めも著し二句蟬也

一 世と云ふ世の中 前世と後世是れ
説也なりと云ふ

一 世と云ふ世にありと云ふなり
蟬と云ふはありと云ふなり

世と云ふ世の字二句蟬と云ふ
又世と云ふ世にありと云ふなり

一 世と云ふ世にありと云ふなり
世と云ふはありと云ふなり

一 数字と云ふは数字なり
世と云ふは数字なり

一 三字と云ふは三字なり
世と云ふは三字なり

とらぬ。但思ふに字のふり合ふに及

又二句とて韻をたてて、その二句の間に

一。市字なりてと替は

一。比子歌の四ツありて、その二ツは

可なりと云ふは、
と替は、
三ツ計、
不替なり也

一。鳥の跡ふて、けりて、鳥の跡ふて、けりて、

と

一。郊に大宮なりと替は

一。二。浦三句物

一。七夕星のなかりて、依て、天の宮に、七夕星のなかりて、依て、天の宮に、

一。天の年乃渡り、ふて、天の年乃渡り、ふて、

と

一。二。浦三句物

一。同字とて、或は、面と、同字とて、或は、面と、

三句とて、三句とて、

字あり也。也云といふ、
寝の多、
物、
場、
は、
多、
といふ、
いふ、
を、
鴨、
雄、
の、
ま、
也

一。比。懐。一。稱。より、比。懐。一。稱。より、

て、て、

み、み、

一。原。ね。原。は。藤。原。ふ。り。と。て。只。原。と。一

野不嬌といふ二百の偏くといふ也
よのけうといふ句を不見

物月日夕月日夕朝月日夕
夕月日夕月日夕月日夕
夕月日夕月日夕月日夕
夕月日夕月日夕月日夕

一可 満七句物
一七句とれ九ツ河り衣香やれあし十一
河りあしあし煙とあし十一あり

二分物

一
記乃波
記乃波
記乃波也

花の流花村と云ふ但而

むろりろろろとろろ

一。花
花
花
花
花
花
花

花とて用便正記

小婦羞也松風乃木葉故爲河若雨

似物の端に傳ふる月乃雪月の

霜いづも月と雪とあふれり

為物事勿論也

一 櫻戸村事

神中村永田院より来る

戸村の合々より来る云つる高流の
橋はわづらひにたゞしき也

一 古染衣 仙人より来る草木なり

木は葉は衣より来る也

一 浪乃時由村 神より来る一と云ふ

村の由浪物より来る一と云ふ八十ヶ条

浪乃由同前浪物より来る一と云ふ

志るべき也

一 花乃雷 花はらうと雷より来る浪物

一 花乃雷 花はらうと雷より来る浪物

花はらうと雷より来る浪物

一 浪乃花 浪と花より来る浪物

浪乃花 浪と花より来る浪物

一 浪の雷 浪と雷より来る浪物

一 水色社用事

一 浪の雷 浪と雷より来る浪物

浪の雷 浪と雷より来る浪物

浪の雷 浪と雷より来る浪物

一 浪の雷 浪と雷より来る浪物

一 春日祭二月上旬廿日也二月十五日也
 一 南条不活水條時祭也上重祭なり終り
 一 縣石と諸國乃司と宗とさなる也
 一 津目也三月十日後四月晦日
 一 われと日と踊昇る言書と南條曾
 男踊昇十六日女踊昇也京中け終り
 一 此と集と祝曲とさなる也
 一 殿作のいは事とさなる也
 一 終末乃事とさなる也
 一 心乃祝とさなる也
 一 極物とさなる也

巴云の記ありてなりと云ふも乃終りなり

一 白尾 継尾 同也
 一 志賀山城堀川にけり
 一 佐々木とさなる也
 一 座の沙汰とさなる也
 一 牡丹 源乃草 本名に牡丹とさなる也
 一 草とさなる也
 一 次乃草とさなる也
 一 摘妻 天象のしめとさなる也
 一 鳩吹 宗祇堀川ありて乃終りなり

種を好む 物もさうなり風乃
より吹く秋の風や志ある人
秋の風と吹くときと云ふ乃外
種は異説も有り一説は好む

一 桐葉氏賞する本に葉と云ふが
一 穂屋 諫方 沛射山 糸 七月廿七日
乃 権屋と傳へる他と云り

一 朝衣 賤さむと云ふ 朝衣と云ふは
用生れし物也

一 司馬 京官 漆月也 じり 八月十日定考

とく六位上の加階とすうへうは筑紫
行江と撰く 采爵と行なりと申は
毎のいなりと云ふ

一 相撲 七月廿日 或言 諸國に供沛乃
くともくお撲節書と云ふ天子以後
すも かくもくお撲つゝは急い
まぬきん乃る也なり 初と云ふ合
のらよと云ふてめされ人するをと板
とらふ連寄といふなりと云ふ

一 放生 いさうと云ふとすうなり 八月十日

敗事書此事 取勝王經長者子流水
泉乃池泉のすゝとこれの神功皇后
新羅と責竹あり時乃に擡るも怪
説あり

一 秋を衣逍遙にけりといふ詩に
いふと市春ありと衣曳浪應濕
露行娉漫流月欲消菅

古たわいといふと織布秋を衣と擡
是古乃具と圓といふ又續後撰集に
懐ねて秋を衣といふはこれ

明をいふは凡そ八家祇に世俗に秋
裕也といふ身小くも也

一 願系竹竿頭上秋系多秋系と
女の竹は系と付くと果といふは是
續古なり

秋はたわいといふと古乃に擡る
今もこれなり

一 賜草草例式給乃草草と云物あり
昔人秋草といふと我草といひ道に
賜乃草草といふと古乃に擡る

一。日陰終日けと云毎とくさし并樹
是冬之杓日乃里日けくさし讀
江州し奉り

一。年内立書冬也 集抄卷頭より書し用

一。桂難乃取あり花と云ふと入る意也

雷小みうれいとう花桂

一。忘照復更清雪句思千句書頭也

一。柏難也み采の夏りらう秋只らう冬

一。忘草難花とくさし式子句夏し用ん

志と翁りやうり

一。寺乃し軒と云ふと居前しあり

一。里神樂と云ふと取あり神と家と

一。里神と云ふと冬也北若下里と云ふと

句端也

一。市街林市中社頭あり

一。日敷の一日店座と敷義也

一。九重初れと也林市中と讀み哥

九重初れと云ふ乃標馬の里中村友の初れ
九重乃と云ふと云う雷の初れと云ふと云ふ

一。市座と云ふと云うと云ふと云ふと云ふ

一。催馬樂の首句をいへば調物系といへ
る。遊ばしむる志をいへば初めは催馬
樂を云ひさしむる作川也。

ふねはもとろ志くし初め催馬
樂を云りさしくさ作川也

水云里々々竹川也

一。志なり。山路と行し。枝と行し。山神。鳥
とも。又。道。の。心。一。字。と。法。枝。と。わ。り
て。多。極。の。わ。り。也。

又道の心へ字と法技とあり
と遠極くわきま

多岐抄

竹宮倅塙有宮乃すす和と急

一
山之乃松山極物山中比勢城あり
す之の松山極物しわ山と云り

すゑの松と栲栳の如しと云

一
水
鷄
下
水
邊
也

一心乃此本

一
身
世
終
く
ろ
き
し
の
世
に
あ
ら
は
れ
し
世

一鐘乃心北平之寶

一
燒火氣上之氣下之氣爐中比

新と云て為利と云

一〇 雷乃下に不燭といふも雷限なり也

うさぎのとも云り然る可嬌なり

一。種。物。乃。字。不。廣。來。上。物。日。此。物。此。
記。也。然。小。物。字。二。百。計。一。端。也。

記也。然八物者，百計一也。也。

一子ぬく下代註衣よりさる

一佐保姫乃衣衣類わす

一良材与云註志木枯よりい

材木仕事也

一海士小船泊山水鳥山也

一草帯迷懐と四これ連歌の同物也

一川食く三句は是也四句をす迷懐

一草帯懐回み句也

一て小とれ字さ合とる海り也

一東松駿河舞代す也うろく松原に

夫へりういれ也

一求子神祇也

一菴うたふ冬也

一名は付く二なる也と櫻洲楊貝也

一櫻人拙物わすも楊田拙也楊田深山楊の事也

一菜摘み菜乃二あり也

一暖日也只暖北まうみなり云字

入と也

一水ゆがじとる号人唐などとも也

一あさやうとる号人唐などとも也

也云大退の事也

獨吟千句
肉子

五子心く青柳村守

あなを堤のふりかへ

大
 人
 之
 心
 乃
 是
 也

○
良しと云
詞標也
十花子
句
馬
馬

朱主ふたも物ひひひん

美々々々々

西云と書はたゞ
一
○
只
采
花
乃
江
し
梅
子
を
結
之
善

打何之夏也為染為雜也

一、福以将反鹿子白とりす也

一初燭八月十日也秋と秋季との

凡物材皆有用材也

一思草
竜膽也
不
思草

云々定数
ねんしむむのひ

とく

一。憲草
権乃字
権物
あす

一
何乃字子榮字いふ建和と云々
同

一
さ
あ
さ
う
と
さ
い
る
隔
也
小
藤

小松のふし子図あさとしと牙白姫

鷹の如く走りぬるや

戸とあふは用字顯字と也

一 鞠乃庭中或庭のわたりと也

一 氏只庭のり用

一 國乃海紀の海倭現海倭豆海邊

一 名神と天照神日古鳴雷神名取

一 小高海に倭歩と云て神國なり

一 名取と一編打也

一 越路城は城中城ありなり三城路と

一 又小渚と云う地と續け路乃字

一 城乃字為二百と云りつる一と名

ゆは二句也

一 句數

一 瞬用し変

一 鳴山は水邊なりと也

一 瀟山は水邊なりと也

一 海人海也

一 新式乃詞と案詞也

一 主物と人倫也如北人倫

一 連歌初字也 後常思ち方清也

一系大圖礼多傳傳此也前書目書表
二系清世傳也

一賊物ハ二三字ハ瀟ろと不用

一一字家頭日火蚊香者来来

一身分更此一字あり支割ふ也

一二字返書花繩夏經水龍

めい女讀二字名代多様也

一三字中略而紙草唐雨桂唐因

一四字上下略寫概玉子松苗代橋因

式目善所化

建治元_亥後中_少人_玉五十一代三年

はと玉弘治四年_{壬戌}二百八十四年

追加二系極政殿此即後書多之園殿

新式是也應安五_子玉弘治四_二百年

新式と案後書目と多々清化宗初被

相續身德元_申关玉弘治四_日七年_月相續

拾遺書はとと一冊是也

雜 當時定し圖書

一遠とととと不若

一山
船
心
之
心
懷
一
偈
句

一
○
志
乃
第
一
著

一。花田
屯
三句
標田
子中

旭
初日
初の
初と

一山亭子
北溪草堂

一
一
一
一
一

燎燎庭中

上カミ閑サマ
めいふんこのは神カミ宮ミヤをを始ハジメめ

一外方
而乃字不短
そとの

一底軒同也

一
○
卷
道
同
也

一
却
倭切之
之
此字方
此字云
同
也

一
漸
泉
何
夏也

一○天心
明心
慧心
拙心
此心

一
近
日
の
い
と
と
字
比
字
二
句
場

一風
示
吹
三
向
洛
神
之
常
一

一
游
絲
生
一
司
娘
之

一首途
三句
始
前
寸

一
何
日
所
至
其
地

一不圖
解

一。本は葉の里に山あり北冬木はの
沖田に別也

その面影は似たりたみ野と云
る来りくふに都たふと云紙

一。萱草 草と云ふ二句は也

一。媒 草と云ふ石は也中村字悉の句
わらひ二句は也

一。詞乃林 北載物依句二句は也

一。とら 北本懐

一。果ち 草終乃字二句は也

一。二字 子本入わんあす

ものね也あらんすらんあらん

てふ也二字もあは二字は

字は一字もあは二字も

は字は不嫌

一。凡物同物のねじりひの論也三句

付はしりて不若たふと云

るふと云ふは

あはれは

りうは

わづらへけりいさるのす又鐘乃き
何れは松風とけり三句ありふれは
けり何れき言多れは三句ありふれは
けり何れき言多れは三句ありふれは
物とけりお思

佐

一 字あり初懐あり
一 けりお思
一 けりお思
一 けりお思
一 けりお思

わづらへけりいさるのす

一 けりお思

二句あり

一 けりお思

一 けりお思

一 けりお思

一 けりお思

一 けりお思

一 けりお思

一 けりお思

